

■ 活動記録 ■

◆ 研究活動 ◆

2012年度先端社会研究所共同研究プロジェクト

指定研究プロジェクトの進捗状況報告

関西学院大学先端社会研究所では、「アジアにおける公共社会論の構想」を基本理念として研究活動を展開している。2012年度から三つの相補的プロジェクトとして「日本班」、「南アジア／インド班」、「中国国境域／雲南班」を定め、それぞれ個別の地域において共同研究を実施して、「包摂」と「排除」の二元論を超える社会調査に取り組んできた。以下、各プロジェクトの進捗状況報告を掲載する。なお、報告は2013年2月時点のものである。

◆ 「南アジア／インド班」プロジェクト

代表：関根 康正（関西学院大学社会学部教授）

南アジア／インド班は、広義の現代南アジア社会における言語間・民族間・カースト間関係にみられる「排除」と「包摂」をめぐる複雑な界面を、フィールドワークと文献に基づき実証的かつ理論的に考察する作業に取り組んでいる。2012年夏以降は、班員による海外フィールドワーク5回、班主催定期研究会3回、班員による共同研究会2回を実施した。

〈班員によるフィールドワーク〉

鈴木 晋介	2012年7月24日～8月4日	スリランカ
中川加奈子	2012年8月13日～8月22日	ネパール
鳥羽 美鈴	2012年10月27日～11月5日	イギリス
鳥羽 美鈴	2012年12月23日～2013年1月5日	アメリカ
関根 康正	2013年3月8日～3月27日	イギリス（予定）

鈴木はスリランカにて「異カースト婚」や「宝石産業をめぐる異民族間分業」をテーマとした予備調査、中川はネパールにてカースト団体をめぐる排除と包摂の動態調査、鳥羽はイギリス、アメリカで活動するインド系作家に関する調査・データ収集を実施した。関根はイギリスにて南アジア系移民の宗教空間建設に関する調査を3月に予定している。

〈班主催定期研究会〉

第1回「イギリスにおける南アジア系移民の政治へのかかわり」（講師・若松邦弘氏（東京外国語大学）、司会・鳥羽美鈴、2012年11月9日、於：先端社会研究所セミナールーム）

第2回「エイジアン音楽という一体性（アイデンティティ）：在英南アジア系ポピュラー音楽の

現在」(講師・栗田知宏氏(東京大学大学院)、司会・鈴木慎一郎、2012年12月14日、於：先端社会研究所セミナールーム)

第3回「南アジア系音楽家のクラブミュージックにおける〈南アジア性〉と〈アンダーグラウンド性〉の変化(講師・サラーム海上氏(音楽評論家/DJ)、司会・鈴木慎一郎、2013年1月30日、於：関学会館 翼の間)

本年度は外部から講師を招聘し、上記3回の班主催定期研究会を実施した。イギリスにおける南アジア系移民コミュニティと現代イギリス政治の動向、在英南アジア系移民の活躍するポピュラー音楽シーンの最先端事情、「エイジアンアンダーグラウンド」ムーブメントのインド本国への還流など、今日の南アジア系社会の諸現象をめぐる多角的な分析報告を受けて、講師諸氏と班員との積極的な討論を重ねた。

〈班共同研究会〉

共同研究会(第3回、2012年10月23日、於：第一教授館ラボ3)

共同研究会(第4回、2012年12月13日、於：第一教授館ラボ3)

共同研究会では、班員による調査報告や、定期研究会の企画等のプロジェクト運営に関する打ち合わせを実施した。

2012年度の研究調査と研究会を通じた討議をふまえ、来年度は各班員による本格的な調査活動(文献調査とフィールドワーク)を実施する予定である。従来の「排除/包摂」二元論では捉えきれない軋轢界面の複雑な入り組み諸現象を説明する理論構築のアウトプットを期し、班員相互の緊密な連携のもとプロジェクトを推進していく。

◆「中国国境域/雲南班」プロジェクト

代表：荻野 昌弘(関西学院大学社会学部教授)

「中国国境域/雲南班」は、中国国境域である雲南において市場経済の浸透に伴う少数民族の文化的変容、民族間関係の変化に見られる「排除」と「包摂」をめぐる実証研究に取り組んでいる。現地調査は、中国昆明から182km離れている雲南省の新平イ族タイ族自治州に着目し、特に少数民族人口が80%以上を占めている夏洒鎮において、タイ族村、イ族村、漢族村を中心に調査活動を展開している。

2012年4月から基礎資料の収集と共有、関連研究会などを経て、2012年8月19日~8月26日までに第一回目の調査を行った。調査期間中の初日である20日には、雲南省社会科学院で研究会を開催し、その後、夏洒鎮のいくつかの村民委員会で現地調査を実行した。

〈雲南省社会科学院の研究会における班員の報告〉

班長である荻野昌弘は、「災害の比較研究試論」というテーマで阪神淡路大震災(1995年)と東日本大震災(2011年)など多くの犠牲者を出した災害と、2002年の雲南新平で起きた大規模土石流による災害に対する李永祥(雲南社会科学院)の研究を中心に比較的視点から議論を展開した。

次に、李建志は「京都じゃっかどうふに記録」というテーマで、イ族の伝統的住宅である「土掌房」との比較研究を念頭において、京町家の紹介と再生に関する問題点を議論した。最後に、西村正男は「描繪雲南」というテーマで、単なる雲南の現代文学史を構築するのではなく、雲南に関する書写（1920-2010年代）を分析することで、知識人（都市人、漢族）と民衆（田舎人、少数民族）の関係を明らかにすることを目的にした報告を行った。

〈第一回目の現地調査の概要〉

第一回目の現地調査は予備調査として、戛洒鎮の曼雅、曼拉、竹園、大平掌、潤之中学などで民俗伝統、災害、信仰、観光開発などいくつかのトピックで調査を行った。短期間の調査であったにもかかわらず、2002年8月に新平イ族タイ族自治州戛洒鎮で起きた土石流による災害とその後の対応に関して村民らの話を具体的に聞くことができた。また、イ族とタイ族の祭祀にまつわる調査でも祭祀を仕切るピモにインタビュー、祠堂に関する解釈など大きな収穫があった。さらに、観光業を進めている戛洒鎮の実情に関する調査もある程度進めることができた。短い期間の調査であったために、各自の研究関心事に対応できる十分な調査データは得られなかったが、少数民族地域と地方行政、中央行政の間の関係に対する理解および関連した社会学理論へ向けた調査研究としては確実な進展と言える。

〈第一回目の現地調査の成果報告〉

荻野は、2012年11月9日～10日開催の第二回アジア人類学フォーラム（中国社会科学院ほか主催）において、調査の成果の一端を *Towards a Comparative Sociology of Disaster* と題して報告した。

〈今後の調査にむけて〉

第一回目の現地調査を経て、雲南少数民族調査における言語問題、1950年代以前の麻薬の密輸やケシ栽培をめぐる集会的記憶、現代文学史の構築における雲南、雲南と台湾のタイ族の比較研究、雲南少数民族地域の観光開発をめぐる中央権力と地方の生活実践などと班員による役割分担がある程度進み、今後にむけた現地調査の土台を固めることができた。

以上の流れを踏まえて、2013年3月9日～3月16日に二回目の現地調査を予定しており、戛洒鎮に対するさらに深い調査を目指すと同時に、これまでの調査データに対する照合を行い、データベースの構築を試みる。

そのほか、2013年2月15日には、中国農村研究を行っている社会学者である田原史起氏をお招きして「中国農村へのアプローチ」という題目で、研究会を開催した。研究会は、田原氏の個人的な農村調査経験とその成果を題材とするものとして、90%以上が農業人口である戛洒鎮の調査に大変重要な意義をもつ内容であった。

上記のような2012年度の現地調査および研究会を踏まえ、2013年度は更に本格的な調査活動を行い、調査結果をもって「排除」と「包摂」の二元論を超える複雑な諸社会現象を説明すると同時に、理論構築をめざすこととする。

なお、2013年8月21日～23日まで、昆明において災害に関するシンポジウムが開催予定であ

り、本研究所からも報告の予定である。

◆「日本班」プロジェクト

代表：山 泰幸（関西学院大学人間福祉学部教授）

日本班の目的は、アジアを中心とした諸外国や日本列島の周縁地域出身の人々が、その出自にともなう文化やネットワークを資源として、価値転換をおこなうさまや、移動民の集住地域、新旧住民の混住地域における力関係の逆転などを捉えることにある。2012年度は、金明秀の量的調査を軸として共同研究が進められた。その他のメンバーは、各自の質的調査および文献資料調査を積み重ねていき、従来の「排除／包摂」といった二項対立的な枠組みからは抜け落ちてきた諸現象や人々の実践領域を明らかにしていくうえでの共同研究の基盤を構築することを目指した。その進捗状況および成果に関しては、日本班研究会を通じてメンバー間で共有するとともに学内外に発信された。以下が、各自の進捗状況およびその成果が報告された研究会の概要（今年度の予定含む）となる。

〈進捗状況〉

山泰幸：済州島出身の在日コリアンの社会的成功者の研究調査を行った。各種の伝記的資料の収集とともにインタビュー調査を実施した。

金明秀：「日本のグローバル化と市民の政治参加に関する意識調査」と題したサーベイを実施した。外国人集住都市会議の会員都市の選挙人名簿を母集団とし、約1300名を対象とした郵送調査を試み、サンプリングとともに実査を行った。

山口覚：高度経済成長期における集団就職の詳細な実態解明を目指すとともに、日本のナショナルな労働市場を前提に表象されてきた行動経済成長期およびその前後における労働市場の描き方の再考を通じて、集団就職を捉えなおしていくことを試みた。先行研究の文献資料を検討し長野県、山形県、東京都、沖縄県などで行政文書および新聞記事検索を中心に調査を実施した。

島村恭則：引揚者をめぐる排除と包摂、および風土病をめぐる排除と包摂に関する研究調査を、北海道帯広市（引揚者）、福岡県久留米市（引揚者・風土病）、高知県高知市（引揚者・風土病）、沖縄県宮古島市（引揚者・風土病）をフィールドとした聞き取り調査を実施した。

難波功士：日本国内で産出された小説・映画・ドラマ・マンガなどに描かれた移動民（移住者、他国籍者などを含む）像の事例を収集し、分析を行った。

川端浩平：非集住的な環境で生活する在日コリアンの帰属意識の変容に関するフィールド調査（岡山県岡山市、倉敷市）を実施した。

〈日本班研究会〉

- ・2012年度第3回先端社会研究所定期研究会 共同研究「日本班」研究会第1回
日時：2012年11月30日（金）16:00～18:00
場所：先端社会研究所セミナールーム
報告者：川端浩平（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）
コメンテーター：島村恭則（関西学院大学社会学部教授）
報告題目：「二重の不可視化と日常の実践——非集住的環境で生活する在日コリアンのフィールドワークから」
- ・2012年度第5回先端社会研究所定期研究会 共同研究「日本班」研究会第2回
日時：2012年12月16日（日）13:00～14:30
場所：先端社会研究所セミナールーム
報告者：許南春（韓国済州大学校教授）
コメンテーター：山泰幸（関西学院大学人間福祉学部教授）
報告題目：「済州大学校在日済州人センターの活動と展望」
- ・2012年度第6回先端社会研究所定期研究会 共同研究「日本班」研究会第3回
日時：2012年12月16日（日）14:30～17:00
場所：先端社会研究所セミナールーム
著者：山口智美（モンタナ州立大学教員）、齊藤正美（富山大学教員）
討論者：山田真裕（関西学院大学法学部教授）、金明秀（関西学院大学社会学部教授）
報告題目：「『社会学の戸惑い』（勁草書房）読書会」

今後は、第4回目の研究会を2月28日（木）に実施し、松田有紀子氏（立命館大学大学院先端総合学術研究科）が「『女の町』の民族誌——花街・祇園町に関する女性史学的研究」を報告する予定である。また今年度中に、各自の研究の進捗状況を報告し、2013年度の共同研究に向けての課題を確認する予定である。

公募研究の進捗状況報告

関西学院大学先端社会研究所では、2012年度の「アジアにおける公共社会論の構想」指定共同研究プロジェクトと関連する研究を行う関西学院大学の研究者を対象にして、計2件の公募研究を採択している。その研究計画については本紀要第8号を参照されたい。本号では、これら公募研究の進捗状況を報告する。

◆戦争をめぐる女性の歴史的エージェンシーに関する比較研究

－第二次世界大戦期における日本人女性と中国人女性の表象－

代表者：Timothy Tsu（関西学院大学国際学部教授）

川端 浩平（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）

本研究を実施するにあたって、以下の二つの目的を掲げた。

①第一の目的は、第二次世界大戦期における女性の役割を比較研究によって明らかにすることである。日中における戦後の語りにおいて、女性たちは夫の戦死や個人的な性的被害や搾取に苦しみられた受動的な被害者として描かれてきた。いわば彼女たちは、そのような逆境における困難を辛抱強く耐え抜いたとともに、母親的な役割を果たした功労者として、人びとに記憶されている。すなわち、大きなリスクと犠牲を代償にし、負傷者を癒し、弱者を支援し、最終的に取り戻された希望と平和の象徴として位置づけられてきた。しかし、これらの女性と戦争の関係を描き出す歴史的な観点は限定的かつイデオロギー的である。そこで本プロジェクトは、女性たちが兵士・偵察者・スパイ・労働者・ボランティア等々として戦争へ積極的に加担した側面と既存の「戦争被害者としての女性」イメージとを付け合わせることによって、女性と戦闘（fighting）というテーマをバランス良く描き出すことを試みる。

②第二の目的は、第二次世界大戦期の女性をめぐる現代的な文化表象に関する考察である。映像・文学・絵画・写真等は、戦時における被害者としての女性の規範的役割のイメージ構築を促してきた。これらの表象を「自然」なものとして受容するのではなく、戦争をめぐるより大きな言説を肯定するために描かれたシナリオとして批判的に考察する必要がある。よって、そのようなシナリオを通じて構築された女性のイメージが、勝利と敗北、侵略と抵抗、死と希望、抑圧と反逆、性暴力と名誉等といった、戦争をめぐる規範的な解釈と結びつけられて一般社会に広がっていったことが問われる。

以上に掲げた研究目標を達成するために、今年度は文献資料の収集とその分析とともに、NIOD（オランダ戦争資料研究所）を中心とした学内外の研究者と連携して、既存のとりくみにおいて描かれてこなかった戦中・戦後をめぐる研究調査を進めて行くための協働体制の構築を進めている。2013年3月中旬には、NIODからはディレクターを務める Marjan Schwegman 教授と研究員の Ralf Futselaar 氏、さらに Tsu が報告者となり国際ワークショップを実施する。このワークショップでの議論と成果を踏まえ、2013年度に NIOD で開催される予定である国際ワークショップ「Fighting Women: East-West Comparison」を実施し、共同研究の成果を発信していくとともに、参加者の論考をまとめたものを出版することをめざす。

◆基地とエロス

- 排除と包摂の戦後日本映画研究 -

塚田 幸光（関西学院大学法学部教授）

本研究の主眼は、フィルムを通じて、戦後史のダークサイドを考察することである。米軍／基地表象と、そこに表出する「性」表象の交差において、如何に排除／包摂の力学を見ることができているのか。敗戦後の占領政策から、米軍基地問題に至るアメリカの影を分析することが狙いである。

プロジェクト始動後は、資料収集活動（文献と映像資料）を中心に、ロマンポルノ（1971年開始）以前・以後という時代区分から考察を行った。

ロマンポルノ以前の性表象、特に戦中・戦後のパンパン映画に関しては、数多の文献資料は言うまでもなく、例えば『夜の女たち』や『白い野獣』など、DVD資料が入手可能なものから分析を進めた。一方、『肉体の門』（1948年）のように、東京国立近代美術館フィルムセンターでの閲覧が必要なものは、2013年3月にまとめて調査する予定である。神戸大学准教授の板倉史明氏（元フィルムセンター主任研究員）や、フィルムセンター研究員の大傍正規氏に協力を仰ぎ、両氏との連絡を密に取りながら、戦中・戦後のパンパン映画に顕著な「性」表象を考察、体系化を行った。その試みは、赤線と米兵の表象関係を見ても、一筋縄ではいかない。例えば、1945年、特殊慰安施設（RAA）の設立と解体に伴う「赤線地区」の指定には、当然のことながらGHQの影／圧力がある。だが、同時期の「肉体文学」やパンパン映画には、赤線が前景化される一方で、米兵の登場は希である。不在の米兵／アメリカは、キリスト教というGHQの民主化政策へと転移し、いわば見えざる神として、娼婦の改心／回心を促す。フィルムの分析は、同時代の歴史と文化の理解なくしては不可能である（パンパン映画において、娼婦は社会のシステムから排除されながら、宗教／アメリカに包摂されると言えはいいだろうか）。

ロマンポルノに関しては、文献とDVD資料の収集を行い、神代辰巳や小沼勝、沢田幸弘や西村昭五郎など、日活映画の系譜とその表象の分析を行った。膨大な日活フィルムに加え、同時期の若松孝二、足立正生、沖島勲、大和屋竺などのピンク映画も見逃せない。若松の終生のテーマであるテロル／エロスの関係とは、戦後から現在に至るアメリカに対する嫌悪と魅惑に他ならないからだ。これらに関する研究成果は、2010年7月にハワイ大学で行った研究発表(Scandal/Japan: Sexual Politics in Koji Wakamatsu's Early Works)を補完し、現在執筆中の論文で開示する予定である。ロマンポルノに類出するスペクタクルな性（とりわけ「レイプ」と「SM」）表象が、如何に政治に接続するのかを明らかにする。

また、戦後日本映画研究において、先日死去した大島渚のフィルムを無視することはあり得ない。塚田は昨年夏より、韓国済州大学校在日済州人センターの研究員であり、「日本映画と朝鮮表象——民族、ナショナリズム、大島渚——」と題した研究を行っている。これは、本研究プロジェクト「基地とエロス」の裏側であり、性と政治の交差を別角度から補完する研究である。これらの研究は互いに重なることで、戦後日本を複層的に考察する契機となる。この成果は、順次、先端社会研究所紀要や出版物を通じて、開示する予定である。